

ブリュッセルのグラン・プラス

～ ベルギー美術と世界遺産 ～



ベルギーの首都ブリュッセルへは、成田国際空港から全日空の直行便が週3便、運航されています。ブリュッセルはパリとアムステルダムの上に位置し、観光の拠点としても最適な都市です。ベルギーには魅力的な街が点在していて、交通網も南部を除けば充実しています。ブリュッセルからは、ブリュージュまで約 50 分、アントワープまで約 1 時間と、鉄道を利用した移動がとても便利です。また、隣国オランダのアムステルダム、デルフト、ハーグなどの人気都市へも、日帰り観光が十分可能です。ベルギーとオランダの主要都市の多くは、鉄道で 30 分から 1 時間程度の距離にあり、駅から市街地まで徒歩で移動でき、つい色々と足を延ばしたくなります。そのため、ベルギー旅行では、周遊ではなく、ひとつの都市に滞在して、各地を鉄道で訪ねることをお勧めします。ブリュッセルは、世界遺産「グラン・プラス」のある旧市街をはじめ、EU 本部がある新市街、アール・ヌーヴォー建築が建ち並ぶルイズ地区など、多彩な魅力に溢れています。その中でも、ブリュッセルを象徴する存在と言え、真っ先に思い浮かぶのは、やはり世界遺産「グラン・プラス」でしょう。

■世界遺産「グラン・プラス」

四方を荘厳な建物に囲まれた「グラン・プラス」は、「世界で最も美しい広場」と称えられています。約 110m×70m ほどの広さで、広場を取り囲むように、市庁舎、ブラバン侯爵の館、王の家(ブリュッセル市立博物館)、ギルドハウスなどが建ち並び、昼と夜で異なる表情を見せる景観美を堪能することができます。広場へは、四方に延びる細い路地から入ります。路地を抜けると突然、眼前に市庁舎が現れ、その威容さに圧倒されます。高さ 96m の優美な塔は、ブリュッセルで最も高い建築物です。夜は広場全体がライトアップされます。華やかな演出ではなく、歴史的建造物を引き立てる控えめな光に、気品を感じます。広場にはカジュアルなレストランも多く、気軽に食事を楽しむこともできます。グラン・プラスは、中世以来、数世紀にわたって形成されました。その間、幾多の戦火に見舞われましたが、復興し、現在に至っています。こうした歴史的変遷と優れた建築技術、都市景観が評価され、1998 年に世界遺産に登録されました。登録基準は(ii)と(iv)。実際に広場に立つと、その評価に深く頷かされます。グラン・プラスでは、世界的に知られる催しも行われています。毎年7月には、16 世紀から続く歴史的伝統行事、「オメガング」が開催されます。中世の騎士に扮した男性、豪華な貴族ドレスを身に纏った女性など、伝統衣装に身を包んだ人々が行進する

様子は壮観です。このオメガングは、無形文化遺産にも登録されています。また、偶数年の8月には、広場一面を色鮮やかなベゴニアの花で埋め尽くす、「フラワーカーペット」が開催されます。まるで“花の絨毯”のような光景は圧巻で、世界中から観光客が訪れます。今年も開催が予定されており、いずれもブリュッセルの夏を彩る風物詩となっています。

■ベルギー王立美術館

ブリュッセル観光で見逃せないのが、「ベルギー王立美術館」です。「王立美術館」とは、ブリュッセルにある6つの美術館の総称です。そのうち、古典美術館、近代美術館、世紀末美術館、マグリット美術館の4館は、同じ敷地内に集まっています。グラン・プラスからは、緩やかな坂道を登り、徒歩約15分。この4館には、ベルギー美術の歩みが時代ごとに凝縮されています。

ここで、ベルギーを代表する画家8人をご紹介します。現在のベルギーという国家区分でまとめると、下記のようになりますが、17世紀頃までは現在のオランダを含むネーデルラント(低地地方)の文化圏として捉えるのが、一般的です。

ベルギーを代表する8人の画家

主な画家（年齢順）	ひと言コメント
ヤン・ファン・エイク (1395年頃～1441年)	油彩画の発展に大きく貢献した画家。プリュージュを拠点に活動し、精緻な描写から「神の手」と評された。他の追随を許さない精緻な技法は、未だ解明されていない。 *既存記事:『北方ルネサンス・中世フランドル地方の芸術都市「世界遺産の宝庫」～画家「ヤン・ファン・エイク」の功績～』
ピーテル・ブリューゲル (1520年代～1569年)	ネーデルラント・ブラバント公国辺り(現在のオランダとベルギーの国境付近)の生まれ。同名の長男も画家。代表作『バベルの塔』や『雪中の狩人』は、日本でも人気が高い。 *既存記事:『ユングフラウ-アレツチュのスイス・アルプス～アルプスを描いた画家たち～』
ピーテル・パウル・ルーベンス (1577年～1640年)	バロック絵画を代表する画家。アントワープを拠点に活動し、ベルギーの宮廷画家としても外交官としても活躍した。代表作は、『十字架昇架』、『十字架降下』、『聖母被昇天』など。 *既存記事:『世界遺産の宝庫 ベルギー「アントワープ」～ルーベンスとバロック絵画について～』
アンソニー・ヴァン・ダイク (1599年～1641年)	ルーベンスの弟子。主にイギリス(イングランド)で活躍した。ブリュッセル近郊のメッヘレンにある世界遺産「聖ロンバウツ大聖堂」に祭壇画『キリストの十字架像』がある。
フェルナン・クノップフ (1858年～1921年)	ベルギー象徴派を代表する画家。代表作『スフィンクスの愛撫』は、1982年に東京国立近代美術館の「ベルギー象徴派」展でも反響を呼んだ。
ジェームス・アンソール (1860年～1949年)	ベルギー北部のリゾート地、オステンド出身。独創的な仮面や骸骨をモチーフに描く画家として知られ、後のシュルレアリスムの画家たちに大きな影響を与えた。
ポール・デルヴォー (1897年～1994年)	シュルレアリスムを代表する画家。静謐な雰囲気 ^{せいひつ} をたたえた女性像を数多く描き、幻想的な世界観で知られています。オステンドには、「デルヴォー美術館」があります。
ルネ・マグリット (1898年～1967年)	ポール・デルヴォーと双壁 ^{そうへき} を担う、シュルレアリスムを代表する画家。モダンアートの世界では、ベルギー国内で最大の人気を誇ります。

王立美術館の中でも特に人気が高いのが、ブリューゲル作品のある「古典美術館」と、マグリット自身の名の付いた「マグリット美術館」。ここでは、このふたりの画家とその代表作品について、ご紹介します。

■ベルギーの誇り「ブリューゲル」

ブリューゲルの名画の多くは、生まれ故郷のベルギーではなく、オーストリアの「ウィーン美術史博物館」に所蔵されています。また、ブリューゲルがふたりいることはご存じでしょうか。父と子、両名とも画家で、しかも同名です。広く知られている名画は父親の作品で、一般的に「ブリューゲル」と言えば、父親の方を指します。ブリュッセルの王立美術館(古典美術館)には、『ベツレヘムの人口調査』と『鳥糞のある冬景色』という作品が所蔵されています。これら2作品には、中世の人々の生活の営みが生き生きと描かれています。服装や被り物、履物、食べ物、農機具、観ているだけで楽しくなってきます。現代ではこのような、“観て楽しむ絵”はたくさんありますが、中世からルネサンス期にかけての絵画には、あまりありません。ブリューゲルは“絵本作家の先駆け”となった画家と言っても、良いのではないのでしょうか。とにかく細部まで丹念に描き込まれています。宗教や王侯貴族を描いたものが大半を占める中、ブリューゲルの作品は現実的な営みに目を向けたものが多く、当時の庶民の姿を知る上でとても貴重な作品となっています。ブリューゲルは理想化された美を追求するのではなく、“目の前にある現実”をより精緻に表現することを重視しています。この点は、精緻な写実表現で知られるヤン・ファン・エイクとは、真逆の視点です。さらに、特筆すべき点として、色彩感覚と空間表現も優れています。室内画から風景画まで幅広く描きましたが、とりわけ遠景の空気感を表現するのに卓越^{たかくま}していました。氷の上を歩く人々、羽ばたく鳥の動き、積もった雪、ひんやりと澄んだ空気が漂っている感じがしませんか。私は、ブリューゲルの描く、遠景の雪景色がとても好きです。



ピーテル・ブリューゲル
『死後に発表された肖像画』
1582年
アムステルダム国立美術館



『エルサレムの人口調査』ピーテル・ブリューゲル
1566年 / ベルギー国立美術館



『鳥糞のある冬景色』ピーテル・ブリューゲル
1565年 / ベルギー国立美術館

■国民画家「マグリット」

マグリットは、ベルギーを代表するシュルレアリスム(超現実主義)の画家です。まず、シュルレアリスムについてご説明いたします。たとえば、現実とは程遠い、奇妙な夢や不可解な夢を見たことはありませんか。シュルレアリスムには、そういった瞬間を描いた作品が多いのです。それを狙っている画家もいます。明け方の夢を思い出しスケッチする、そこからスタートし、頭の中で物語を完成させて、作品にしていけます。普通の人なら、起床したら、すぐにそのような夢は自然と忘れてしまいます。しかし、シュルレアリスムの画家たちは覚えているのです。それは貴重な題材だからです。シュルレアリスム絵画には、一見では理解しがたい世界観があるため、画家自身の思想や何を表現したいのかメッセージを考えながら鑑賞することも、大きな魅力のひとつです。実際にはありえない非現実の世界を描く、つまりこれが、シュルレアリスム=超現実主義なのです。シュルレアリスムはあまりにも独創すぎて、敬遠されがちです。なのに、なぜ画家マグリットは多くの人々に受け入れられたのでしょうか。代表作『大家族』と『ピレネーの城』は、鳥の形をした巨大なシルエットや宙に浮かぶ巨大な岩など、非現実な光景が描かれています。しかし、波や空などは写実的で現実的な風景が広がっています。現実的な表現がしっかりとあって、インパクトのある“奇妙なもの”が1点、描き込まれています。また、その“奇妙なもの”の色調は、他と対立する色調ではないので、背景に溶け込んで見えて、違和感がありません。そこが、マグリットの作品の美しさです。多くのシュルレアリスム作品が強烈な個性や激しさ、不安感を伴うのに対して、マグリットの作品には調和の取れた静謐な感じが伝わってきます。そこが、他のシュルレアリスムの画家と大きく異なる点であり、今日に至るまで世界中の人々を魅了し続けている理由ではないでしょうか。



ルネ・マグリット
1961年10月18日撮影
カルナヴァレ美術館
パリ歴史博物館



『大家族』ルネ・マグリット
1963年/宇都宮美術館



『ピレネーの城』ルネ・マグリット
1959年/イスラエル美術館

■アール・ヌーヴォー建築と世界遺産

ブリュッセルの魅力は絵画だけではありません。この街を訪れたなら、ぜひ建築にも目を向けていただきたいです。見逃せないのは、アール・ヌーヴォー建築です。ルイズ広場の南エリアは、アール・ヌーヴォー建築の宝庫となっています。古き良き街並みの中にモダンでお洒落な雰囲気が感じられます。



ストックレ邸



オルタ美術館

ブリュッセルには、ふたつの資産が世界遺産に登録されています。『ストックレ邸』と『建築家ヴィクトール・オルタによる主な邸宅』です。ストックレ邸はウィーン分離派(ゼセッション)の建築家ヨーゼフ・ホフマンの設計によるもので、ブリュッセル郊外の高級住宅地にあります。しかし、残念ながら内部見学はできません。ストックレ邸にはオーストリアの画家、グスタフ・クリムト(1862年~1918年)の作品も所蔵されています。また、ウィーン分離派とは、クリムトが中心となって設立した新進気鋭の芸術家集団のことを指します。保守的な芸術家集団のキュンストラーハウス(芸術家同盟)から分離したので、「ウィーン分離派」と呼ばれています。一方、ヴィクトール・オルタは、アール・ヌーヴォー建築の先駆けとして知られ、世界遺産には、オルタ邸、タッセル邸、ソルヴェイ邸、ヴァン・エドヴェルド邸の4棟が登録されています。オルタ邸は現在、「オルタ美術館」として一般公開されています。場所が分かりにくいのですが、中層階の建物が立ち並ぶ一角にあり、似たような他の建物と横並びで建っているため、気づかずに素通りしてしまう人も多いそうです。私はタクシーで近くまで行って、地図を片手に周辺のアール・ヌーヴォー建築の建物を約2時間かけて散策し、起点となるメトロのルイズ駅まで歩きました。ヴァン・エドヴェルド邸以外は、いずれも距離が近く歩いて周れるので、ぜひ訪れてみてください。アール・ヌーヴォーは、植物や花など自然界にあるものをモチーフにした曲線美が特徴的な、19世紀末から20世紀初頭にかけて起きた芸術運動です。後の1920年代に起きた幾何学的な装飾芸術運動、アール・デコと対比されます。ルイズ地区から南エリアは、ブリュッセルの中でも特に、こうしたアール・ヌーヴォー建築の建物が随所に見られ、120年以上前の姿のまま残されています

■ブリュッセル郊外の世界遺産の街 ～メッヘレン(アントワープ州)～

ブリュッセルからちょっと足を延ばしてみましょう。ブリュッセル中央駅から近郊電車で約30分、「メッヘレン(Mechelen)」という街に着きます。日本では、あまり馴染みのない街です。メッヘレン駅で下車し、歩くこと約30分、旧市街に着きます。手持ちのガイドブックには「メッヘレン駅」を起点として紹介されていましたが、旧市街を訪ねるのでしたら、もうひとつ先の「メッヘレン・ネッケルスポール(Mechelen-Nekkerspoel)駅」の方が便利です。メッヘレンには、『フランドル地方のベギン会の建物』と『ベルギーとフランスの鐘楼群』の、ふたつの世界遺産があります。ベギン会修道院は、街はずれにひっそりと佇んでいて、隣に資料館のような小さな建物がありました。訪問時には、観光客らしき人影はありませんでした。また、鐘楼群の構成資産としては、街の中心地に、聖ロンバウツ大聖堂とホフ・ヴァンプスレイデン博物館の、ふたつの鐘楼があります。特に聖ロンバウツ大聖堂は、約97mを誇る街の象徴であり、大きなカリヨンの音が街全体に響き渡ります。また、聖堂内には、アンソニー・ヴァン・ダイクの祭壇画『キリストの十字架像』が所蔵されています。



聖ロンバウツ大聖堂

いかがでしたでしょうか。ブリュッセルとその近郊には、歴史的建造物からアール・ヌーヴォー建築まで、多彩な世界遺産があります。ベルギー美術についても、時代に応じて特筆すべき画家を輩出し、中世から現代に至るまで豊かな美術文化を育んできた街です。フランスとオランダという観光大国に挟まれて、短期間のツアーではもったいない魅力的なところですよ。じっくりと時間をかけて、その奥深さを味わっていただきたい街です。

沼田政弘